

# A・MUSEUM

vol.33  
[2002.9.25]



ミュージアムパーク  
茨城県自然博物館



トワダカワゲラの幼虫 (撮影：今井初太郎氏)



ムカシトンボ (撮影：今井初太郎氏)

## 生きた化石が生息する森

茨城県北部の八溝山や花園山に行くと、その溪流<sup>ひらいゅう</sup>沿いで生きた化石といわれる昆虫に出会うことができます。

トワダカワゲラ *Scopura longa* は、成虫になっても翅<sup>はね</sup>のない原始的な昆虫です。幼虫は溪流の源流域に生息し、水温の低い流れの石や落ち葉の下などにいます。成虫は晩秋にあらわれ、川岸近くの地上や植物の上を歩き回ります。氷河期の遺存種（氷河期には広く分布していたが、その後の温暖化に伴い、山間部へ生息域がせばめられた種）ともいわれています。

ムカシトンボ *Epiophlebia superstes* は、中生代に栄えた古代トンボの一群ですが、現生種は日本も含めて世界中で1科2種しかいません。ムカシトンボは、最初サナエダマシという名前がつけられました。しかし地質時代の *Heterophlebia* に似ている特異なトンボであることを明確にするため、1913年にムカシトンボと改称されました。幼虫の生息地は溪流の源流域で、成虫は初夏にその周辺を敏速に飛び回ります。

(資料課：久松正樹)

第26回企画展

「稲 いのちと文明の植物—イネ科ワールドへようこそ—」

Oryza, The Plant of Life and Sapience —Welcome to Our Grassic Park—

イネ科ワールド、それは、イネを中心としたイネ科植物に関する情報の発信基地です。

そして、そこで得られる情報には、例えば、以下のようなものがあります。

- ①イネ科植物とはどんなグループの植物なのか？
- ②なぜ人はイネ科植物を選んで栽培したのか？
- ③イネ科植物の穀類にはどんなものがあるのか？
- ④イネという植物は、どこがすばらしいのか？
- ⑤田んぼが史上最高の発明品といわれるのはなぜか？
- ⑥日本人とイネはどのように出会ったのか？

もちろん、展示物は、乾燥標本や解説パネルばかりではなく、イネ科植物の実物も間近にご覧いただけます。そのなかには、この企画展のために、九州から運ばれる5mを超える草「ダンチク」や、栽培イネに最も近い野生のイネ科植物「オリザ・ルフイボゴン」が驚くような形の実を付けた姿も含まれます。



オリザ・ルフイボゴンの種子

会場構成としては、展示室の前半部分で、特にイネ科植物というグループの全体像とイネ科の穀類について紹介します。野生種と栽培種を比較して、栽培化（ドメスティケーション）について知っていただいたり、現在食用として栽培されている植物の形をじっくり観察していただくこともできます。

前半部が終わると、次はシンボル展示のエリアです。ここでは、「食」以外でのイネ科植物の利用の代表例として、屋根を低くして構造を見やすくした、茅葺き屋根の建物を配置します。このような建物は、年配の方にはどことなく懐かしく、小さなお子様には逆に見たことも聞いたこともないものかもしれませんが、その全体は見事なほどにイネ科植物製品なのです。



茅葺き屋根の製作例 (撮影：伊藤正章氏)

また、その先には、未来に向けたイネ科植物の活用例として、千葉大学工学部の協力によるワラボードームと呼ばれる構造物を設置します。こちらについては、言葉で説明するよりも実際に見て、そして触っていただくのがよろしいかと思えます。



イネ

後半部は、イネについての展示になります。イネの歴史、田んぼの役割、浮きイネの姿、シーボルトが採集した江戸時代のイネ、現在の品種の数々など、イネに関する展示物を見ていただきながら、イネの重要性と今回のタイトルでもある、イネがいのちと文明の植物と呼ばれる理由についても明らかにしていきたいと考えています。

晩秋の一日、ゆったりとイネ科ワールドで遊び、わたしたち日本人とイネという植物の友情にも似た関係について想いをはせていただくことができればと思います。

(資料課：高野信也)



秋の田んぼ

**会期** 平成14年10月19日(土)～平成15年1月13日(月)  
**開館時間** 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)  
**休館日** 月曜日(ただし、11月4日、12月23日、1月13日は開館し、翌日休館します)  
 年末年始 12月28日～1月1日  
**入館料** 大人 720円(580円)  
 高・大学生 440円(300円)  
 小・中学生 140円(70円)

※( )内は20名以上の団体料金です。  
 ※未就学児、65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。  
 ※春・夏・冬休み期間中を除く毎週土曜日は、高校生以下の児童・生徒は入館無料です。  
 ※この料金には、本館内常設展・野外施設入場料が含まれています。

企画展記念イベント

- 「かやぶき屋根のひみつ発見」  
 講師：木間塚勝吉氏(茅葺き屋根職人)  
 11月17日(日)午後1時～3時
  - ミュージアムコンサート  
 「尺八—イネ科の奏でる日本の調べ—」  
 12月22日(日)午後1時～3時
  - 「21世紀の地球とイネの国、日本の役割  
 ～日本の水田文化を見直そう～」  
 講師：富山和子氏(立正大学教授)  
 1月12日(日)午後1時～3時
- ※事前にお申し込み下さい。申込み方法等詳細については本号インフォメーションの欄をご覧ください。本号発行時に定員をこえ受付を終了している場合にはご了承下さい。

## 研究ノート◎飯沼川周辺環境学習プログラム開発事業



江川（猿島町生子） この辺りが最も水質がよいと思われる

「21世紀は、水の時代」という言葉を最近よく耳にします。それは、環境として、資源として、また文化として「水」が注目されているからです。そして、近年さまざまな企業、行政機関、学校や市民団体が水を保全する活動に取り組んでいます。ときには、それらの団体が連携して河川の水質保全活動に取り組み、成果を上げています。

当館に隣接する菅生沼は、茨城県自然環境保全地域に指定されていますが、沼へのゴミ流入の問題や、沼へ流れ込む河川を含めた水質の悪化などが心配されています。さらに、土砂の流入により沼が浅くなり、湿原化が年々進んでいます。

また、平成12年12月の「博物館の望ましいあり方」調査研究委員会（文部省委嘱事業）で、今年度からの完全学校週5日制の導入を踏まえ、「博物館による学習援助のプログラムを開発し、充実させること」が指摘されました。

そのような背景のなかで、博物館は、今年度より「飯沼川周辺環境学習プログラム開発事業」を新規事業として始めました。これは、菅生沼に注いでいる飯沼川（西仁連川、東仁連川、江川）と周辺の里山をモデル地とした環境学習プログラムを開発するものです。

プログラムは、近隣の小中学校16校の協力を得て、県西地方総合事務所や境土木事務所、県西教育事務所などの行政機関や自然環境の専門家と連携して開発します。

今年度は各種のプログラムを開発し、それをもとに翌年度か

ら調査が行われますが、特に次の2つの基本プログラムについては、小中学校の協力により、試行を重ねながら開発する予定です。1つは、「飯沼川の河川環境調査プログラム」です。これは、飯沼川の水質や河川に生息する動植物について調査するものです。そして、身近な河川の実態を知り、環境を保全しようとする意欲が高まることを目標としています。

もう1つは、「飯沼川流域の里山生き物調査プログラム」です。飯沼川流域の生き物たちの生活する場所、採集方法、見分け方などを分かりやすく示し、調査結果を地図に記録していくものです。これは、調査を行うことで、里山の自然に興味を持ち、その多様性に気づいてもらうことを目標としています。現在、それぞれの学校では、河川やその周辺の水田や畑、林などの「里山」の自然について調査を行っています。

これらの調査は、各学校で行うだけでは、単なる点としての活動で終わってしまいますが、それぞれの調査結果を博物館が集約することで、調査地点が線で結ばれます。今後、小中学生の活動にとどまらず、地域の方々からの情報が集まることによって、やがて線が面へと変わっていきます。飯沼川流域が、活発な環境保全活動が行われる地域となればと考えています。

（資料課：宮崎淳司）



飯沼川（岩井市幸田新田） 西仁連川との合流地点

## 小さな発見—ミュージアムコンパニオン◎アメンボみてみよう

前回の「ア・ミュージアム」に、コンパニオンによるスポットガイドの記事が載っていたのを皆さんは憶えていますか。

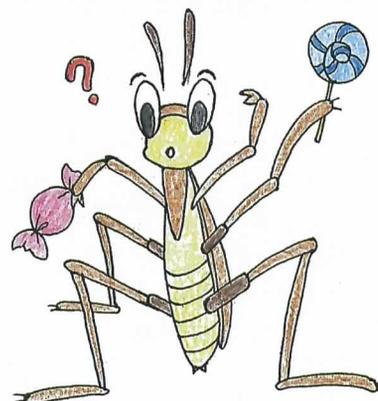
先日行った私のスポットガイドのテーマは「アメンボみてみよう」です。実際に顕微鏡を用いてその体のしくみをみてもらい、水に浮く理由を知ろうというものです。

ひとつおりの説明の後、私がアメンボを水槽からシャーレに移そうとした時です。手からあの独特の匂いが。そうです、「鮎あめの香りがする」からアメンボ。まさにその匂いがしたのです。本では知っていた知識

ですが、実際にその匂いを嗅ぐのは、私にとって初体験でした。同様に子供達も驚いたり、感心したり。

スポットガイドでは、文献を利用したり、学芸員の助言を受けながら、皆さんに様々なことをお伝えしています。しかし、今回のこの出来事によって改めて、自ら「体験する」ことの大切さを感じました。

ところで、皆さんはアメンボの体から出る匂い、嗅いだことがありましたか？  
（ミュージアムコンパニオン：逆井みどり）



## 展示紹介◎博物館の歴史を物語る—企画展ポスター—

当館は、平成6年11月に開館し、まもなく9年目を迎えます。来館者に様々な自然についてより深く理解していただくため、またタイムリーな話題を提供するために、企画展は私たちが最も力を入れる仕事のひとつです。その中には、海外の博物館と協力して行った企画展や、2度開催した市民コレクション展も含まれています。

これらの企画展ポスターが、1階図書室入り口のところにずらりと並んでいます。9月29日まで開催の「時を超える生き物たち」のポスターを含めて、早いもので計28枚になります。ご覧になったことはあるでしょうか？

### ●ポスターに込められたメッセージ

ポスターは、企画展を代表するものを中心に置くようにしています。そして、そのポスターの中には、スタッフの様々なメッセージが込められています。次に3つのポスターを例に挙げ、それらに込められているメッセージを紹介します。

### ●第19回「蟹の泡吹き・エビのつぶやき」

これはヘイケガニの甲らです。源平の合戦で敗れた平家一門の亡霊が、このカニになったという伝説もあります。この面は、自然を破壊してきた人間たちへの怒りを表しているのかもしれません。

### ●第22回「SATOYAMA」

現在、里山の保全がさかんに叫ばれていますが、里山の自然の大切さを今の子どもたちに伝えていくことは、私たち大人の役目です。そんな願いを、「里山で遊ぶ子どもたち」で表現しました。

### ●第25回「時を超える生き物たち」

中心には、この企画展のシンボリック的存在であるオウムガイ。それが永い時を超えて今に至っていることを、深海の世界から飛び出してきたように表現しようと考えました。

これからも、今までとは違ったテーマや切り口で、企画展を行っていきたく考えています。展示内容とともに、是非ポスターにも注目してみてください。今までとは違った博物館の楽しみが、生まれるかもしれませんよ。

(資料課：太田俊彦)



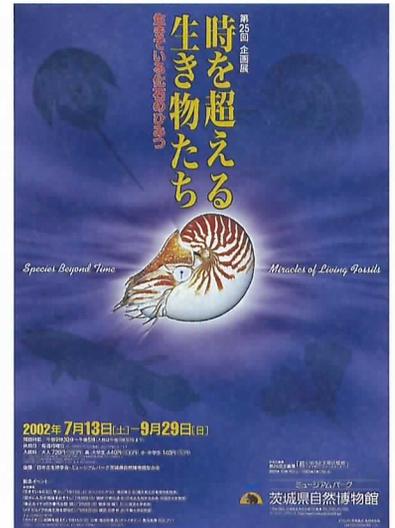
(写真上・下) 図書室入り口のポスター展示コーナー



第19回「蟹の泡吹き・エビのつぶやき」展ポスター



第22回「SATOYAMA」展ポスター



第25回「時を超える生き物たち」展ポスター

## 野外だより◎ダンゴムシを観察してみよう

誰もが一度は捕まえたことのある生きもの、ダンゴムシ。捕まえようとするとかくなる、そんな可愛らしい生きものに夢になったことはありませんか。

ダンゴムシは庭や公園、校庭など、土のあるところで見つけることのできる身近な生きものですが、「どんな生きものか」をよく知る人は少ないようです。ダンゴムシは節足動物門甲殻綱という仲間に分類され、この仲間にはエビやカニが含まれます。

ダンゴムシは7対、14本の足を使って歩きます。目は複眼で、明暗がわかる程度で

す。そのかわり触覚は敏感で、物にふれたり、においを感じたりしています。ダンゴムシは脱皮をして成長します。はじめにからだ下半分を脱皮し、それから1日以内に上半分を脱皮します。そして脱皮すると、ぬいだ殻を食べてしまいます。一生のうちに5回か6回の脱皮をします。そして、ダンゴムシを観察していくとおなかにもっているダンゴムシが見つかるでしょう。ダンゴムシのメスは、おなかの袋(育房)に5~200個の卵を産みます。卵を腹にかかえて育てるのはカニと同じなのです。見

つけるだけでは終わらせず、ダンゴムシの面白さをじっくり観察して、身近な自然に目を向けるきっかけにしてみませんか。

(資料課：湯本勝洋)



オカダンゴムシ (*Armadillidium vulgare*)  
オカダンゴムシ科

## 歳時記●東の名月、西の明星

### 9月26日の西空(日没直後)



※ステラナビゲーターVer.5(Astroarts社)で作製

「十六夜(“ためらう”という意味月)といひます。そのあとは、日ごとに約30分ほど遅れながら「立待(立って待つ間に出る)月」、「居待月」、「寝待月」と続きます。これに対して春分の日近くの月出は、日ごとに70分も遅れるの

最大光度になります。この明るさは1等星のおよそ100倍、近くの少し左上のアンタレス(1等)と比べてみると、見た目にどれだけ違うかわかるといひます。また天体望遠鏡やバードウォッチング用フィールドスコープ等をお持ちの方は、ぜひ金星に照準を合わせてみましょう。そこには、三日月の形をしたその姿を見ることができるといひます。秋の夜長に、“東空の名月、西空の明星”を、ぜひお楽しみ下さい。

(教育課：高橋 淳)

9月21日は仲秋の名月です。この日に月を見る習慣は、中国では唐の時代より行われ、日本でも平安時代には伝わっていたようです。

ではなぜ毎月のように満月があるのに、仲秋(旧暦で8月のこと)だけ特別扱いをされたのでしょうか。その理由のひとつは、この時期の月出の時刻です。当然ながら満月は、日没直後の東の空に見ることができます。しかし天候によってはちょうどその日に見ることができないこともあるでしょう。満月の次の日に見たいと思った場合、月出は30分ほど遅れます。「まだかなあ〜」と待っているあいだに出てきますので、この日の月を

です。ちょっと待ちきれませんよね。

もうひとつは、秋になると空気の透明度が増し、鮮やかに月を鑑賞できるようになるためと考えられます。同じ意味で冬も同様なのですが、月の鑑賞を楽しむには気温が低過ぎます。

ちなみに、旧暦は、明治5年以前に日本で使われていたカレンダーのことで、月の動きをもとにしてつくられています。旧暦の各月1日は新月で、1日ごとに月は満ちてゆき15日には満月になります。今年の9月21日は、ちょうど旧暦の8月15日にあたります。

また、初夏の頃より西の空に明るく輝いていた金星が、9月26日、-4.6等の

### 月出時刻【東京2002年】

3月 29日 18:36 (満月)  
30日 19:49  
31日 21:01  
4月 1日 22:11  
2日 23:18

9月 21日 17:53 (仲秋の名月)  
22日 18:18 (十六夜の月)  
23日 18:42 (立待月)  
24日 19:08 (居待月)  
25日 19:35 (寝待月)

(誠文堂新光社「天文年鑑2002版」より)

## 収蔵品紹介●集められたタヌキたち

下の左側の写真にあるサンプル瓶の正体は、県内各地から集められたタヌキたちの骨です。タヌキたちの死因は様々で、あるものは飼犬に咬まれ、あるものはダニによる皮膚病が間接的なその原因です。しかし一番割合が高いのはやはり交通事故になります。バラバラの破片になっている標本は、事故による衝撃で頭が砕けているためです。

さてこんなに同じタヌキばかり集めて、一体何になるのかという疑問を持つ方もいるでしょう。博物館に展示するならば、1体あれば十分ではないかとの意見もあるでしょう。

しかし、集められた大量のタヌキは、展示のための予備という訳ではありません。研究用の標本として、茨城県のタヌキたちの集団についてのとても貴重な生物学的情報を提供してくれます。骨と同様に、胃の内容物、生殖器などが収集さ

れ、それらを用いて死んだタヌキたちの性別、年齢、栄養状態、繁殖状況、体のサイズなどが調べられます。また筋肉や体毛からは、遺伝的な特徴も分かります。タヌキ1体だけの収蔵では、地域のタヌキたちのこうした情報を判断することは不可能です。同じ種類のタヌキであっても、性別、年齢、採集された地域などのバラエティーに従って、大量の標本が集められる理由がお分かりいただけた



標本棚に収められたタヌキの頭骨の一部  
現在、100体以上が収蔵されている。

でしょうか。

さて、もう一枚の写真は、博物館の冷凍室に収容されて解剖を待つタヌキやその他の哺乳類たちです。時間を見つけては解剖と標本化を行っているのですが、マンパワーには限りがあり、なかなか冷凍室の棚が空かないのが現状です。早く標本に加工して、収蔵庫に保管したいのですが……。

(教育課：山崎晃司)



冷凍室の一角を占領する哺乳類たち  
こうしている間にも続々と死体が集まってくる。

## 館職員レポート◎ 亜熱帯地方の植物調査

根本 智 (教育課・植物研究室)

今年の6月下旬に休日を利用して、梅雨明けしたばかりの沖縄本島へ行きました。亜熱帯の自然林が広がるやんばる（沖縄本島北部地域）の植物相調査、さらには10月から始まる企画展「稲いのちと文明の植物」で取り上げるサトウキビの取材が主な目的です。

### 「自然の宝庫」・・・やんばる

やんばるの森はスダジイを優占種としてオキナワウラジロガシ、イスノキ、イジュなどの亜熱帯性照葉樹林に覆われています。多くの固有種が分布生息し、その動植物の固有種の数には190種以上にも及びます。



やんばるの森

那覇に到着した私たちは車で名護市を経由し、国頭村にある野生生物保護センターに到着。午後から環境省レンジャーの斉藤さんの案内でやんばるの森に入り調査を開始しました。道路では車に轢かれたばかりのハブに出会ったり、国の特別天然記念物ノグチゲラの姿を見ることもできました。森の中は、シダ植物が生い茂り、まさに恐竜がいた時代にいるかのようなものでした。

5時間ほどの調査で採集した標本は110種を超えました。



照葉樹林の中の巨大なヒカゲヘゴ

### カヌーで探索「マングローブ林」



マングローブ林をカヌーで進む

東村を流れる慶佐次川はヤエヤマヒルギの北限地で、この一帯は沖縄本島最大のマングローブ林となっています。川からの視線は自然との一体感が味わえ、林の中の様子がよくわかります。大潮のこの日は観察には絶好で、ヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギなどマングローブを形成している植物だけでなく、ミナミトビハゼやシオマネキのなかまも数多く顔を出していました。



落下し成長したオヒルギの種子

### 海岸付近に見られる植物たち

大宜味村の海岸の岩場には、企画展「時を超える生き物たち」で紹介したソテツの他に、アダンやモンパノキ、オオハマボウ、クサトベラなど亜熱帯特有の海岸植物が見られました。



モンパノキ

### 「ウージの森」・・・サトウキビ

ウージは沖縄の方言でサトウキビをいいます。3~4mにも生長する姿を森とよぶのでしょうか。この栽培植物は約450年前に中国から渡来したといわれます。現在は沖縄の全耕地面積の5割強を占めています。イネ科の多年生草本で精製砂糖（黒糖）の原料となります。詳しくはイネ科植物の企画展をお楽しみに。



サトウキビ畑（糸満市）

わずか4日間でしたが、ヤンバルクイナやアカヒゲ、シリケンイモリ等を間近に見ることができたのは幸運でした。

## コラム by director NAKAGAWA ◎ジュニアテープカッター

第25回企画展「時を超える生き物たち」のオープニングの日、従来にはなかった風景が会場前に繰り広げられました。新企画展会場のオープンとなりますと館内外の関係者が揃ってテープカットをするのが通例ですが、今回は一般募集しましたお子さんによるテープカットが行われたのです。しかも、25回という回数にちなんで25人のテープカッターが勢揃いするという豪華版でした。これは、今回の企画展が「時を超える生き物

たち」という生命の賛歌をテーマにしていますので、未来に伸びゆく子供さんこそテープカッターにふさわしいのではないか、というアイデアでした。

当日は応募された子供さん方が家族の皆さんと一緒に出席になり、予想通り楽しく活気に満ちたオープンとなりました。参加した子供さん達は、記念撮影をしたあと学芸員の説明を聞きながら展示を楽しみ、記念品を受け取って顔を輝かせていました。



イラスト：瀬楽かおるさん

## トピックス◎6～8月

### 学術交流国際シンポジウム「コリアの自然史は今」開催 6月16日(日)

第24回企画展「コリアの自然史—大陸と日本を結ぶ生きものたち—」最終日に開催した学術交流国際シンポジウム「コリアの自然史は今—自然史研究の現状と課題—」は、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本の研究者や自然保護関係者17名を演者に招き、朝鮮半島の野生生物に関する自然史研究を中心に情報交換を行う、国内でも初めての試みとなりました。当日は、国内外から、自然史研究に携わる方や今回のシンポジウムに関心をもった方など多数参加し、演者の方からの朝鮮半島の自然史に関する貴重

な報告のほか、会場との活発な意見交換なども行われました。今回の学術交流国際シンポジウムの開催をひとつの契機として、自然を通しての今後ますますの相互交流が進むことを期待しています。



貴重な話題で盛りだくさんだったシンポジウム

### 企画展記念イベント「巨大いん石が地球をおそう」7月28日(日)

日本古生物学会会長、早稲田大学教授である平野弘道氏を講師にまねき開催された今回の企画展記念イベント「巨大いん石が地球をおそう—恐竜・アンモナイトの絶滅—」。夏休み前半に開催されたイベントということもあり、多くの親子連れの方々が参加していました。巨大いん石が地球に衝突した結果どのようなことがおきたか、なぜ恐竜・アンモナイトが絶滅したかなど、最新の研究成果をも

とにした興味深いお話に、参加者は皆さん熱心に耳を傾けていました。



資料を指しながら説明する平野先生

### カブトムシ里親総会 8月11日(日)



カブトムシについての質問に答える里親たち

4月6日、カブトムシ里親の皆さんに、幼虫を配布しました。それから4ヶ月たった8月11日、大切に育てたカブトムシをつれての里親総会が開催されました。幼虫から、見事に成虫となったカブトムシたち。今回の総会では、その成長をお互いに報告しあったり、飼育の難しさを相談したり、または来年に向け、オス・メ

### ボランティア記念日 7月20日(土)

このほど、当館で活動する多くのボランティア、館職員が参加してボランティア記念日の行事が開催されました。

また当日は、日頃のボランティア活動の様子を来館者に紹介するパネル展示や、海の日イベントへのサポート、ボランティアによる特別野外ガイドの開催など、幅広いボランティア活動が館内外で展開されました。

記念日の行事では、中川館長から「新しい博物館とボランティア」とのテーマによるボランティアへの講話ののち、館職員からのホットニュースの紹介や交流会なども行われ、ボランティア、博物館の相互理解が一層深まりました。交流会終了後には、ボランティアが生息環境づくりに取り組んでいる博物館野外でのホタルの観察会も開催され、充実した記念日となりました。



大好評だった館職員からのホットニュース

スのペアとするためお互いのカブトムシを交換したりするなど、カブトムシを通して里親の輪が更に広がっていきました。

また、参加者の方からは、「カブトムシの飼育を通して“生き物”は“オモチャ”ではないことを子供が感じてくれれば良いなと思っています」とのカブトムシの飼育を通しての感想がよせられました。

## 水系だより

去る7月20・21日に行われた、海の日記念イベントのひとつ、「磯の生きものタッチングプール」は、夏の風物詩になりつつあるようです。今回のタッチングプールの生きものは、今年、7月に茨城県ひたちなか市磯崎海岸で採集しました。その数20種215点(ウニやカニ等)。

採集した生きものたちは、2日間のイベント期間中、元気に生きてくれました。それは、生きものが安心できるように、水槽の中に隠れ家として磯場に似た環境を工夫したり、水質などが悪くならない

ように、<sup>ろ過槽</sup>ろ過槽や水温調節機を設置したからです。それから、生きものに触れられる時間を、1日2回(午前の部11時から12時と午後の部1時から2時)に限定しました。

イベントも無事終わり、タッチングプールで活躍した生きものたちは、博物館の第3展示室海の水槽(常設展示水槽)に移動し、ふたたび展示されています。

このタッチングプールが多くの人の海に興味を持つきっかけになれば良いと思っています。

(水系担当：山本 研)



タッチングプールでの一コマ

## インフォメーション (10～12月の行事)

自然観察会 (定員：各40名) ※現地集合

▲10月6日 (日)

『北浦のプランクトンを観察しよう (潮来市)』

●11月10日 (日)

『サケの遡上と採卵を見てみよう (桂村)』

(対象：●は小学生以上、▲は小学4年生以上 小学生は保護者同伴)

自然講座 (定員：■100名、▲40名)

■10月18日 (金) 18:30～20:30

『野生動物の環境化学物質汚染を探る』

▲11月17日 (日) 13:00～15:00

『かやぶき屋根のひみつ発見』

(対象：■中学生以上、▲小学4年生以上)

会場：■鼎三の丸庁舎生涯学習センター (水戸市) ▲博物館内)

ミュージアムコンサート (定員：300名)

『尺八 イネ科の奏でる日本の調べ』

12月22日 (日) 13:00～15:00

(対象：小学生以上)

自然教室 (定員：40名)

10月5日 (土) 10:00～12:00

『土の中の小さな生きものをさがそう』

(対象：小学生以上)

大人&子どもフィールドガイド

※現地集合

(定員：大人20名、子ども30名)

10月19日 (土)

『久慈川と袋田の自然 (山方町)』

子どもコース (対象：小学生のみ)

河原でささがしをしよう

大人コース (対象：中学生以上)

海底火山の跡を歩こう

〔観察会等への申込方法〕

2週間前までに電話または博物館ホームページでお申し込み下さい。なお、希望者多数の場合は、抽選を行います (自然講座、ミュージアムコンサートは先着順)。

本号発行時には受付を終了しているものもあります。予めご了承ください。

ミュージアムパーク

茨城県自然博物館

TEL 0297-38-2000

0297-38-0927

(イベント申込直通)

<http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>

サンデーサイエンス【楽しい体験教室】

月ごとにいろいろなテーマで、毎週日曜日にディスカバリープレイス内のスタディールームで実施しています。

観察や実験、工作などの体験をとおして、楽しみながら自然への関心を深める機会です。

テーマ

10月『もみじのしおりづくり』

11月『マユ玉人形をつくろう』

12月『ワラであそぼう』

～イネ科ワールドへようこそ～

時間 午前の部 10:30～12:00

午後の部 14:00～15:30

(但し、12月は午後のみ)

わくわくディスカバリー

親子向けの参加体験型イベントです。

10月26日(土)『秋の爽り』

モビールをつくろう』

11月23日(土)『クリスマスリースを』

つくろう』

時間 午前の部 10:30～12:00

午後の部 14:00～15:30

【サンデーサイエンス・

わくわくディスカバリー受付】

開始時間の1時間前から、スタディールーム前で受け付けます。希望者多数の場合は抽選を行います。

自然についてわからないこと、ふしぎだな、と思っていることなど、なんでも気軽に博物館にご相談ください。(来館・郵便・電話・eメールで受付)

その他のイベント

ネイチャーウォークラリー大会

10月27日 (日) (8:30～15:00)

往復ハガキに、参加人数、コース【A:ファミリーコース(6km)、B:ラクラクコース(3km)】、代表者の氏名(ふりがな)、年齢、住所、電話番号、参加者全員の氏名、年齢をご記入のうえ、10月5日(土)までにお申し込み下さい。

アミューズデー(開館記念日) 11月3日(日) 特別イベント開催

サイエンスデー(入館無料日) 11月13日(水) 特別イベント開催

●小・中・高校生無料入館 ■休館日 ●サイエンスデー

10月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

ご利用案内

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ
	企画展開催時	通常時	
大人	720円(580円)	520円(420円)	200円(100円)
高校・大学生	440円(300円)	320円(200円)	100円(50円)
小・中学生	140円(70円)	100円(50円)	50円(30円)

(注)：( )内は団体料金(20人以上)

未就学児・65歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。つぎの日の入館料は無料です。

●4月29日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)

●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日

●高校生以下の児童・生徒は、毎週土曜日は入館無料です。

(但し、春・夏・冬休み期間中を除く)

【休館日】

●毎週月曜日(但し、10月14日(月)・11月4日(月)・12月

23日(月)は開館し、翌日休館となります。)

●年末年始 12月28日～1月1日



- 常磐自動車道谷和原ICから20分。
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、東武野田線愛宕駅～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分。



【開館時間】

午前9時30分から午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【編集後記】

暑い夏もようやく終わり、そろそろ「実りの秋」を迎える季節となりました。「実りの秋」ということで皆さんがまず

思い浮かべるのはなんでしょうか。おいしい食べ物はたくさんありますが、私は「お米」です。この秋の博物館では、お米も含めた「イネ科」の植物の不思議に

迫ります。どんな不思議があるのか、身近な植物だけに楽しみです。

(T・K)

自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2002年9月25日

〒306-0622 茨城県岩井市大崎700番地 TEL0297-38-2000

ホームページ <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>

E-mail [webmaster@nat.pref.ibaraki.jp](mailto:webmaster@nat.pref.ibaraki.jp)